

人參養榮湯の基本的な考え方と フレイルへの臨床応用

日本中医学会 会長／
平馬医院 院長
平馬 直樹 先生

入江漢方内科クリニック吉祥寺
院長
入江 祥史 先生

人參養榮湯は気血両虚に用いる代表的な漢方処方であり、近年では急速な高齢化に伴って患者数の増加が予想されるフレイルに対する有用性にも期待が寄せられている。西洋医学的な観点からフレイルを中心とした高齢者医療における有用性の検討が進んでいるが、一方で人參養榮湯はわが国では古くから用いられてきた処方であり、古典における評価も高い。

そこで今回は、長年わが国における中医学の発展に尽力されている平馬直樹先生をお招きして、人參養榮湯の基本的な考え方とフレイルへの臨床応用をテーマに、入江漢方内科クリニック吉祥寺 院長の入江祥史先生とご対談いただいた。

I 人參養榮湯は十全大補湯より 応用範囲が広い

入江 気血両虚証に用いる気血双補の代表的な漢方処方の一つである人參養榮湯は、最近ではフレイルを中心に高齢者医療における有用性が期待されています。そこで、日本中医学会の会長として広く活躍されている平馬直樹先生と、人參養榮湯を多面的に考えたいと思います。

平馬 人參養榮湯は『太平惠民和劑局方』の「治癰冷門」に記載されている処方で、曲直瀬流の処方集である『衆方規矩』や、その後に編纂された『古今方彙』や『勿誤藥室方函口訣』にも収載されているように、日本では古くから比較的ポピュラーに用いられてきました。

人參養榮湯は気血双補の効能を有する慢性の消耗状態

に用いる処方ですが、同じ気血双補の処方である十全大補湯に比べ臨床応用の範囲が広いという特徴があります。

入江 気血双補の処方というと、十全大補湯を思い浮かべる先生も多いと思います。

平馬 それぞれの処方構成から考えると、違いが鮮明になります。気虚の基本処方である四君子湯と、血虚の基本処方である四物湯を合わせた処方が八珍湯（または八物湯）であり、これが気血両虚証に対する気血双補の基本処方といえます。さらに八珍湯を発展させた処方が人參養榮湯と十全大補湯です。十全大補湯は気血両虚に陽虚が加わった状態に効果がありますが、人參養榮湯は八珍湯から川芎を除いて、黄耆、肉桂、五味子、遠志、陳皮を加えた処方ですから、十全大補湯と同様の方向性に加えて陰虚もカバーできるという特徴があります。



入江 祥史 先生

1991年 大阪大学 医学部 卒業
1995年 大阪大学大学院 医学研究科 修了(医学博士)
2003年 慶應義塾大学医学部 東洋医学講座 助手/
慶應義塾大学病院 漢方クリニック 医長
2017年 入江漢方内科クリニック吉祥寺 院長

II

気血両虚の基本的な考え方

入江 気血両虚証について、基本的なところからの解説をお願いします。

平馬 気血両虚証は、「気」と「血」の働きがともに不足・減弱した状態で、慢性の消耗状態と考えてよいと思います(表1)。つまり気血両虚証は、気の虚と血の虚の両方が合わさったもので、それらがいろいろな程度で混ざり合っている状態です。

入江 気血両虚証の具体的な症候について解説をお願いします。

平馬 気虚は気の機能のどれかが、あるいは複数の機能が低下した状態で、疲労倦怠や息切れなどの症状として現れます。血には、身体の栄養・滋潤、そして気の働きを制御して気が暴れないように身体を安定した状態に保つ寧静の機能があります。血の機能が低下するとめまい、耳鳴などの症状や、女性では月経異常が現れることがあります(表2)。

さらに気血両虚になると、これらが入り混じった状態となります。病気の遷延化や身体が消耗状態になると、気虚・血虚の両方の症状が現れることが多くあります。

入江 先程ご紹介いただいたように、気虚に対しては四君子湯、血虚に対しては四物湯が基本処方ということになりますね。

平馬 四君子湯は6種類の生薬で構成されていますが、とく

に人参、白朮、茯苓、甘草の4生薬が重要な“君子”ということで四君子湯と名付けられました。中でも主薬は人参で、身体の元気を補うもっとも頼りになる生薬です。白朮と茯苓も胃腸の働きを整えて消化吸收の機能を高める健脾の働きがありますし、甘草も胃腸の気を補う、あるいは高める働きがあります。甘い薬は身体を養う働きがあるので補剤には多く含まれています(表3)。

入江 白朮・茯苓の組み合わせもよく登場しますが、これも非常に相性が良い組み合わせですね。次に、四物湯について解説をお願いします。

平馬 血虚に対する補血の基本処方四物湯です。構成生薬の中でも当帰と熟地黄が血を補う代表的な生薬で、芍薬は補血の働きもありますが肝の陰を養う働きがあり、熟地黄と当帰の働きをバックアップしています。川芎は気と血をめぐらせる働きに優れているので、補った血を全身の組織に供給するという働きをしています(表3)。

入江 芍薬と甘草の組み合わせが、芍薬甘草湯としてこむら返りなど筋痙攣に対して広く用いられていますが、陰を補うことで筋痙攣を抑えると考えてよいですか。

平馬 芍薬は「酸」、甘草は「甘」ですが、酸味の生薬と甘味の生薬を組み合わせると酸甘化陰といって身体の陰分を生じさせるという考えがあります。陰の中には津液なども含まれるので、筋肉が潤いを失って痙攣しやすくなってい

表1 気血両虚証の成因

- 気血両虚証は、人体の活動を支えるもっとも重要な物質である「気」と「血」の働きがともに不足・減弱した状態。
- 気血両虚証の成因は、
 - ① 体質虚弱
 - ② 脾胃虚弱による気血の産生不足
 - ③ 慢性疾患や術後、精神情緒の乱れによる消耗
 - ④ 出血(出産、月経過多なども含む)による気血の喪失など

平馬 直樹 先生ご提供

表2 気虚・血虚の症候

- | 気 | |
|---------|--|
| ● 気の働き | 推動・温煦・防御・固摂・気化 |
| ● 気虚の症状 | 疲労倦怠、息切れ、声や呼吸に力がない、めまい立ちくらみ、ちょっと動くとすぐ汗をかく(自汗)、舌質淡苔白、脈無力など。 |
| 血 | |
| ● 血の働き | 栄養・滋潤・寧静 |
| ● 血虚の症状 | めまい、耳鳴、顔面は蒼白で艶がない、眼がかすむ、爪が固くカサカサになりあるいは変形する。手足が痺れたり知覚鈍麻をきたし、筋肉がピクピク痙攣する。不眠・夢が多い、心悸不安、健忘。女性では月経は出血量が少なく色が薄い、希発月経や閉経となることもある。舌質淡苔白、脈細。 |

平馬 直樹 先生ご提供

る状態、あるいは陰陽のバランスが崩れて陰が陽を抑えきれなくなって痙攣などを引き起こす状態において、芍薬と甘草の組み合わせは陰を補い、身体の潤いを増して痙攣を鎮めます。



補気の基本生薬である人参と黄耆

入江 では次に、補気・補血をさらに生薬から解説していただきます。

平馬 補気の代表格は人参と黄耆です(表4)。

人参の代表的な効能は大補元気であり、肺・脾・心に帰経します。つまり、人参は身体に気を取り込む重要な働きをしている脾と肺の機能を強化します。また、精神情緒を安定させ、意識をはっきりさせる安神という働きと、不足した津液を生み出して身体を潤すという生津という働きもあります。たとえば、白虎加人参湯は白虎湯と人参から成る処方ですが、人参を組み合わせることによって口渴を



平馬 直樹 先生

1978年 東京医科大学 医学部 卒業
北里研究所付属東洋医学総合研究所で研修
1987年 中国中医研究院广安門医院に留学
1996年 平馬医院 副院長(2008年 同 院長)
2011年 日本中医学会 会長

表3 四君子湯と四物湯

四君子湯(人参、白朮、茯苓、甘草、生姜、大棗)

- 方中の**人参**は薬性が甘温で、大補元気、健脾養胃の効があり、主薬。
- 苦甘温の**白朮**は、健脾益気だけでなく、脾の湿をさばく燥湿和中の効があり、臣薬。
- 佐薬の**茯苓**は甘淡平で、健脾補中滲湿。白朮と茯苓の組み合わせはきわめて相性がよく、すぐれた健脾除湿的作用がある。
- 使薬の**炙甘草**は甘温益気調中で、四味をあわせてバランスの取れた益気健脾のユニットとなっている。

四物湯(熟地黄、当帰、芍薬、川芎)

- 方中の**熟地黄**は甘微温で、滋陰補血の効にすぐれ、主薬。
- 当帰**は辛甘温で補血養肝、和血調経の働きにすぐれ、臣薬。
- 白芍**は酸苦微寒で、養血柔肝の効があり、**川芎**は辛温で活血理気、の効がある。

いずれも血分に作用する薬であり、熟地黄の補に、川芎の散を配し、川芎の発散に芍薬の収斂を配したバランスにすぐれた配合となっている。

平馬 直樹 先生ご提供

和らげ、身体を潤します。

黄耆も補気の基本生薬の一つで、肺・脾に帰経します。黄耆の特徴の一つに、下がってしまった気を上に持ち上げる昇提の働きがあります。また、衛気を強化することで外邪が侵入しないように身体を護るような働きや発汗調節作用などがありますから、少し動くと汗をかく、しょっちゅう風邪を繰り返すような方には黄耆が奏効します。

この他に、外傷後の肉芽増生や組織の修復を促す作用、また水に対しては、人参は津液を補う方に働きますが、黄耆は身体の余分な水の排出を促す働きがあります。

入江 人参だけだと浮腫をきたす方がときどきいらっしゃいますが、そのような場合は黄耆と組み合わせることが良いですね。次に補血薬についての解説をお願いします。



補血の基本生薬である当帰と熟地黄

平馬 補血の代表格は当帰と熟地黄です(表5: 次頁参照)。

当帰は性味が辛甘であり、甘さが血を補い辛さが血をめぐらせる働きがあります。

血虚の状態でもっともダメージが大きいのは肝と心ですが、当帰は肝・心・脾に帰経し、とくに肝血を養うことで血虚の症状を改善します。また、月経の調節作用に優れていることから“婦人の聖薬”とも称されます。

血が不足すると心は運ぶべき血が不足するために心の機能が低下しやすくなりますが、当帰はそこを養います。

表4 補気薬

人参

補気薬の代表格の人参は、ウコギ科のオタネニンジンの根茎で、性味は甘・微苦、微温、肺・脾・心に帰経する。効能は大補元気・補脾益肺・生津・安神。もっとも頼りになる補気薬。



黄耆

マメ科のキバナオウギの根である黄耆は、性味は甘、温、肺・脾に帰経し、効能は補気昇陽、固表止汗、托瘡生肌、利水消腫など多彩で、体表の衛気を強化し、気の下陷を昇提するなど独特の効能を併せ持っている。



平馬 直樹 先生ご提供

表5 補血薬

当帰

当帰はセリ科の植物（ミヤマトウキなど）の根で、独特な香りを持ち、味は辛甘、肝・心・脾に帰経する。

補血の作用にすぐれ、肝血を養い、血虚証の諸症状を改善するほか、とくに月経の調節作用にすぐれる。婦人の聖薬と呼ばれる由縁である。

また辛味があることから血のめぐりを促し、瘀血を解消する活血化瘀作用も併せ持ち、手足を温めたり痛みを止める作用にもすぐれる。

熟地黄

熟地黄はゴマノハグサ科のジオウの根を蒸して修治したもの。加工することによって甘みが強くなり精血を補益する力にすぐれる。

性味は甘、微温で心・肝・腎に帰経する。

腎精と肝血を補うどちらにもエース級の働きをする。肝腎両虚証にはぴったりの薬物。



平馬 直樹 先生ご提供

表6 浅田宗伯の十全大補湯と人參養榮湯の処方解説

十全大補湯

浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』には「此方、局方の主治によれば、気血虚すと云うが八物湯の目的にて、寒と云うが黄耆・肉桂の目的なり。又下元氣衰と云うも肉桂の目的なり。又黄耆を用ふるは人參に力を併せて汗、盜汗を止め、表氣を固むるの意なり、肉桂を用ゆると、九味の薬を引導して夫々の病む処に達するの意なり。何れも此意を合点して諸病に運用すべし」という解説があり、応用の参考になる。

人參養榮湯

浅田宗伯の『勿誤藥室方函口訣』には「此方は気血両虚を主とすれども、十補湯に比すれば遠志・橘皮・五味子ありて脾肺を維持するの力優なり。三因には肺と大腸俱虚を目的にて下利喘乏に用いてあり。万病とも此意味のある処に用うべし。又傷寒壞病に先輩炙甘草湯と此方を使い分けてあり、熟考すべし。又虚勞熱ありて咳し下利する者に用う。」

平馬 直樹 先生ご提供

また、辛味による血のめぐりを促す作用があることから、瘀血にも対応できます。

入江 当帰は血を補い、めぐらせるということですが、地黄はどうでしょうか。

平馬 地黄は血をめぐらせる働きはなく、血を補う作用のみです。帰経は心・肝・腎ですが、熟地黄はとくに腎精と肝血を補う強い働きがあります。血が不足していれば精が補充し、精が不足していれば血が補充するというように、お互いが補充しあう関係があることから、肝腎両虚証にはぴったりの生薬です。

胃腸が弱い方は胃もたれなど胃腸に負担になることがあるため、地黄が配合された人參養榮湯や十全大補湯を処方される際には服用量を加減するなどの配慮も必要です。とはいえ、人參養榮湯や十全大補湯には人參や白朮、茯苓など胃腸機能を高める生薬も配合されているので、服用しても何ともない患者さんが大半です。

表7 津田玄仙の人參養榮湯の解説

口訣

黄耆建中湯は張仲景の方で、人參養榮湯、十全大補湯、帰脾湯の類はみな後人が仲景の黄耆建中湯に倣って組み立てた変方である。その使用目標もほぼ同じであるが、3方それぞれに多少の区別がある。人參養榮湯は津液の枯渇、十全大補湯は気血の虚寒、帰脾湯は心脾の血虚を目標とする。これが3方の区別である（療治経験筆記）。

鑑別

すべて気血を調補する諸方の役割は次のように心得ると良い。四物湯は血虚の方、四君子湯は気虚の方、八物湯は気血両虚の方、十全大補湯は気血両虚に寒を兼ねた方、帰脾湯は心脾血虚の方、人參養榮湯は津液枯渇の方である。この心得で諸病に臨めば、大きな間違いはない。

また津田玄仙は、十全大補湯との違いについて、十全大補湯は肉桂・黄耆など温める薬が主になっているのに対し、人參養榮湯は遠志などが配合され、気血の不足、とくに心血の不足によって心気が不安定になって起こる健忘・不眠・動悸などの症状にも対応できる処方と解説している。

平馬 直樹 先生ご提供

入江 さほど心配しなくてよいということですね。

平馬 使い始めにご注意いただきたいと思います。地黄が合わない方や脾が非常に弱っていて地黄を使いにくいという患者さんもいらっしゃるで、そのような場合は地黄を含まずに気血を補う帰脾湯などを用いると良いと思います。

V 気血双補の基本処方の 発展系としての人參養榮湯

入江 気血双補の処方について、十全大補湯と人參養榮湯の解説をお願いします。

平馬 気血双補の八珍湯の発展処方に十全大補湯と人參養榮湯があります。十全大補湯は四物湯と四君子湯に黄耆と肉桂を合わせた処方で、原典は『太平惠民和劑局方』の「諸虚門」です。浅田宗伯は自身の処方集である『勿誤藥室方函口訣』で解説していますが、非常にわかりやすく参考になります（表6）。

入江 人參養榮湯についてはどのような記載がされていたのでしょうか。

平馬 人參養榮湯については、津田玄仙が『療治経験筆記』に詳しく解説しています（表7）。人參養榮湯、十全大補湯、帰脾湯の使用目標は黄耆建中湯とほぼ同じですが、とくに“津液の枯渇”が人參養榮湯の特徴であると述べています。さらに津田玄仙は補中益氣湯の8つの使用目標と同様に人參養榮湯についても8つの使用目標（使用目標八症）を述べています（表8）。ここでは人參養榮湯が気血双補の基本処方であることを前提に、さらに8つの症候があると人參養榮湯の証であることを教えています。

入江 すべてが老化現象そのものですね。第一に「毛髪

脱落」がありますが、これは優先順位が高いということですか。

平馬 脱毛は血と腎精を補う方向から治療しますが、人參養榮湯は肉桂や熟地黄も配合されて腎精も補う処方構成となっていることから毛髪脱落に奏効する処方であるという考え方なのだと思います。そして、最初に毛髪脱落を見たら次に顔色を見なさい、ということで、いわば問診の進め方を教えているのだと思います。

入江 焦点の当て方を示している、いわば問診の手順書のようなものなのですね。

平馬 浅田宗伯も『勿誤藥室方函口訣』において人參養榮湯の解説をしています(表6)。ここでは遠志、橘皮、五味子が加わることによって、脾・肺の機能を維持する力は十

全大補湯に勝っている、と述べています。また、炙甘草湯との使い分けについて、炙甘草湯は心の陰陽両虚の状態を治療しますが、人參養榮湯は慢性消耗状態における陰陽を補う働きということで、働く場所が異なるということ述べています。

さらに、肺結核の消耗状態で咳が出て下痢をする者に用いるとあります。肺結核の熱は陰虚の熱であることが比較的多いですが、身体を温めるとかえって熱を助長することもあるので、陽だけでなく陰も補う必要があることから十全大補湯よりも人參養榮湯が良いと述べています。

入江 人參養榮湯の症例についてご紹介をお願いします。

平馬 曲直瀬道三が衆方規矩に記している症例を紹介します(表9)。この症例はまさに津田玄仙の「使用目標八症」の第一に推奨している毛髪脱落を呈しています。

北山友松子の症例も毛髪疎黄、肢体の瘦燥と、曲直瀬道三の症例とも共通するような症状があります。

三例目は山田業広の症例です。この症例では、八物湯(八珍湯)で気血を補う方針は良かったのですが、身体に元気が出てきたことと身体の中にまだ病気が潜んでいるということで、陰陽のバランスが悪くなって陰陽両虚の状態が脈に現れてきましたが、気血両虚にさらに陰・陽を補うということで人參養榮湯が用いられたわけです。また、川芎を除いていますが、これは遠志や五味子の効果を打ち消してしまうという考え方があると思いますし、気のめぐりを良くするためにマイルドな理気薬である陳皮に置き換えたと考えられます。

表8 人參養榮湯と補中益氣湯の使用目標
津田玄仙『療治経験筆記』より

人參養榮湯の目標	補中益氣湯の目標
①毛髪脱落。 ②顔色に艶がない。 ③集中力がなくなり健忘する。 ④口がまずく味がせず食欲がない。 ⑤動悸がして眠れない。 ⑥全身の皮膚がかさつく。 ⑦爪が固くなって割れる。 ⑧筋肉に潤いがなくて攣る。	①手足の倦怠感。 ②声に力がなく小さい。 ③目に力がない。 ④口の中に白い泡状のものが生じる。 ⑤食べ物の味がなくなる。 ⑥熱い飲食物を好む。 ⑦臍のところで動悸がする。 ⑧脈が散大で力がない。
当歸・白朮・熟地黄・茯苓・人參・桂皮・芍薬・陳皮・遠志・黄耆・甘草・五味子	人參・白朮・黄耆・当歸・柴胡・陳皮・大棗・乾生姜・甘草・升麻

平馬 直樹 先生ご提供

表9 人參養榮湯の症例

曲直瀬道三の治験(衆方規矩)

ある人が傷寒を患って癒えた後、眉髪が脱落し、面色が悪く、杖に頼らないと歩行ができない状態が1年余り続いた。私が人參養榮湯を与えると、20余貼で毛髪が生じ、歩けるようになり、50貼を服して本復した。

北山友松子の治験(医方口訣集頭書)

ある貴婦人が、子供を多く産み育てたため、肢体が瘦燥し、頭髪が疎黄となり、薬油を塗抹したりしたが寸効なく、私に治薬を命じた。そこで人參養榮湯を勧めると、百余貼で脈が潤い、髪が長くなった。まことに前哲の言は信するべきものがあり、およそ気血虚弱から現れる様々な諸症には、この湯の効が極めて顕著である。

山田業広の治験(井見集付録)

34歳の婦人が3人の子を分娩し、末産のあと良人と分かれて貧苦したため、短気を発して挙動が困難となったが、静歩すれば一里の道を行くこともできるということで、ひたすら心身を劇用せぬことを勧めるにとどまった。飲食並びに二便は平であるが、時に噎膈吞酸するため、多食はできず、月経はあるが僅少である。診ると脈は沈伏で微弱、舌上は平、心腹満急である。初めに八物湯加半夏陳皮を与え、大調経散(大豆、茯苓、琥珀：六科準繩)を兼用すると短気が去り、食も大いに進んだ。しかし咳を發し、脈は弦大となり、かつそれが雀啄のごとく、屋漏のごとくで、さらに全身の動悸も同様である。そこで前2方に替え、『和劑局方』の人參養榮湯を投ずると、その咳、脈ともに全く治り、遂に休薬を命じた。出入りすること1ヵ月ばかりで凱歌をあげたが、その方は十全大補湯から川芎を去り、五味子、橘皮、遠志の3味を加えたもので、遠志に去痰の効能があることを初めて知り覚えた。

平馬 直樹 先生ご提供



人參養榮湯に特有の生薬について

入江 人參養榮湯は、八珍湯に黄耆のほか肉桂(桂皮)、遠志、五味子が加わっています。これらの生薬について解説をお願いします。

平馬 肉桂(桂皮)はシナモンの味を思い浮かべていただくとおわかりのように、ピリピリとした辛味と甘味がありますが、甘味で補って辛味で陽気を全身にめぐらせます。効能は温中補陽で腎陽虚や脾陽虚の冷えに有効です。さらに冷えを取り除いて痛みを止める働きがあり、冷えによる腹痛や腰痛、関節痛や頭痛にも用いられますし、温通経脈の作用で月経不順や経痛などにも応用されます(表10：次頁参照)。

遠志は薬性が苦辛温で、帰経は心・腎・肺です。効能は安神益智ですが、これは精神情緒を安定させること、認知症のような物忘れなどを改善するという考え方です。また、心腎不交といって心気と腎気の調和を保つことができなくて心気が暴れてしまうことで寝つきが悪くなる不眠症

表10 人參養榮湯の生薬

肉桂

- クスノキ科のケイなどの幹皮、性味は辛甘大熱、肝・腎・心・脾・胃に帰経する。
- 温中補陽の効能があり、腎陽虚、脾陽虚の冷えに有効。
- 散寒止痛の作用で、冷えによる腹痛、腰痛に用いる。
- 温通経脈の作用で、経寒血滞の月経不順、経通などに応用。



遠志

- ヒメハギ科のイトヒメハギの根または根皮である遠志は苦辛温の性味、心・腎・肺に帰経する。
- 安神益智の作用が主で、化痰の作用も持つ。
- 心気と腎気を交通させ、意識を安定させるので、不眠や逆に傾眠に用い、健忘にも有効とされる。
- 化痰の働きがあり肺の寒痰（薄くて透明な痰）咳嗽にも応用される。



五味子

- マツブサ科のチョウセンゴミシの成熟果実である五味子は、酸温の性味、肺・心・腎に帰経する。
- その酸渋の薬性から収斂作用があり、斂肺止咳定喘、固表斂汗の作用がある。
- また益腎固精すなわち腎気を補い、その封蔵の働きを助け、遺精、滑精、頻尿、尿失禁などにも用いる。
- 渋腸止瀉の作用で慢性の下痢に応用。
- 益気生津の作用で気陰両虚の口渇に応用。



平馬 直樹 先生ご提供

状に対して、遠志は心気と腎気のバランスを整えて心気を安定させて睡眠の質を改善しますし、傾眠傾向に用いることもあります。

入江 化痰について、認知症患者さんの大脳皮質などに沈着するアミロイドβなどを痰の一つと捉えるとわかりやすいかもしれません。

平馬 身体の中の水液代謝が失調して生じた余分な病理産物を取り除くという意味合いでの化痰という考え方もあると思います。また、化痰については肺の寒痰の咳嗽にも応用されます。人參養榮湯には陳皮も配合されていますが、遠志と陳皮を組み合わせで化痰の力を強めたいという目的だと思います。遠志が配合されていることで、十全大補湯に比べて応用範囲はより大きく広がったと考えられます。

五味子は薬性が酸渋ですが、酸っぱい生薬の代表格です。酸っぱい味というのは収斂の働きがあるので、肺気が収まらずにひどく咳き込むときに肺気の収斂で喘息を抑えるような作用がありますし、毛穴が開いてだらだらとした発汗によって消耗してしまうような場合、黄耆と組み合わせることでその効果がより発揮されます。

益腎固精、すなわち腎の固摂作用を高めることで腎気不固の状態、遺精、滑精、頻尿、尿失禁などにも有効です。また、酸っぱいものは食べると口中に唾液がわいてきますが、益気生津ということで気陰両虚の口渇にも応用されま

す。ですから、シェーグレン症候群には麦門冬を合わせることで乾燥症状にも有効です。

入江 五味子、麦門冬に人參を加えた生脈散という処方がありますが、これらの生薬を加えることで、応用範囲が広がりますね。

平馬 とくに遠志と五味子が加わったことで、十全大補湯とは性格の異なる使い方ができるようになりました。

まとめ VII フレイルに対する人參養榮湯の可能性ー

入江 最後に、処方構成からみた人參養榮湯の応用範囲をまとめてください。

平馬 人參養榮湯は消耗性の疾患や病後、先天的な体質虚弱、さらには老化も含めての気血両虚証に幅広く応用できます。気血双補の基本処方である八珍湯に対して、十全大補湯は黄耆と肉桂を加えて温補通陽の力を高めることで、さらに陽虚が加わった病態に対応できますが、人參養榮湯は五味子を配合することによって気陰両虚証にも対応できる処方です。この点については、津田玄仙が“津液の枯渇”を強調した由縁です。熟地黄、芍薬、五味子、人參を組み合わせると滋潤、養血、生津の働きが発揮できて身体の組織を潤す力が強くなります。そして、潤す働きを損なわないように温燥性でめぐらす働きの強い川芎を除いていると解釈することもできます。

さらに遠志を配合することによって動悸、不眠などの心神不寧症候にも対応できますし、遠志＋陳皮で去痰の効能を発揮して、慢性消耗性の呼吸器疾患にも応用できる組み合わせになっています。

このような作用によって人參養榮湯は慢性の消耗状態や老化によるいろいろな症状を呈しており、さらにこのような症候が加わっている時に幅広く応用できる“名処方”だと思います。

入江 最近ではフレイルに人參養榮湯が有用であるという報告も散見されるようになりました。

平馬 筋肉量が衰えている状態は、気血両虚に陰陽両虚も加わった状態ですから、人參養榮湯はまさにフレイルに最適な処方だと思います。

入江 津田玄仙の人參養榮湯の使用目標八症のほとんどの項目が老化に直接結びつきます。

平馬 加齢に伴って種々の複数の病気をお持ちで体調がすぐれないというような方には、使用目標八症を実際にお持ちの場合も多いと思いますので、そのような方には人參養榮湯が効果的だと思います。

入江 本日は、読者の先生方にも非常に参考になる貴重なお話をいただき、ありがとうございました。